

品は、不同の質量をけっして複雑にすることなしに興味深く組み合わせている。注意深く選ばれた、時にはまったく正反対の素材の融合で、それが作品として仕上げられた時には誰もがその型破りな組み合わせを不自然に感ずることなく受け入れてしまう。

ナニングは職人的な確立された技術を革新的な素材と組み合わせ、彼女独自の個性を創造した。

個性の創造は、粘土を回転台に置いて回転させること、そして熱いガラスに息を吹き込むことから始まる。そこから生まれたフォルムをカットしたり、組み合わせたりしてさらに制作プロセスを進める。素材がガラスでも粘土でも同じだ。彼女の芸術表現は、既成のものに乗ってしまうのではなく、新しい道を切り開き、新しい宇宙を形作るどころにある。

自然はいつも、生物的なものと無生物的なものどちらも、彼女のインスピレーションの大切な源である。結晶、くらげ、花そして微生物などを、彼女は19世紀的な粘り強い情熱でフォルムや構成、幾何学的パターンを観察している。

ナニングはいつも、不変と流動、秩序とカオス、硬さと柔らかさ、原則と変則を互いに組み合わせる。それらをいつもコントラストさせ、見る者を当然のように驚かせる。

極東

彼女のインスピレーションにはいつも、極東の影響が垣間見える。

北斎のうねる波、禅寺の石庭、数世紀を隔ててなお聳え立つ老木、漆器や着物から選び出されたモチーフなどだ。実は、何かエキゾチックなものへの興味や関心は、非常にオランダ的だと言えなくはない。

オランダが数世紀にも渡って極東と交易関係を持っていた長い歴史が、こうしたオランダ的エキゾチック趣味の生まれる原因だった。これにナニングは、彼女自身の個性的で現代的な手法と味を加えたのだ。

「作品を完璧に仕上げること…、例えば過剰なものを省いたり、それから作品に適切な静寂を適切な手法で加えたりすることなど、そうした作品を完全なレベルまで仕上げていく情熱は、日本へ行った後に私が自分のアトリエに持ち込んだものです。日本では深く物事を追求していくことや、物を集中力を注いで作り上げることが大切にされ、育まれています。色やフォルムは、日本人にとってはたいへん大切な要素で非常に心を傾けています。」

「禅寺の石庭で、すばらしい樹木を見ました。ふしくれだって、とても味のある姿の木です。細心の注意を払って剪定がされた木の、その姿が持つ強さは感動的です。」

本質

バーバラ・ナニングは、古さと新しさを、東洋の豊かさとオランダの質実さを、そして規範ある自由と感情ある理性をつなぐ。ナニングの作

ジオード/ 晶洞石

再度新たな挑戦に挑みたいという芸術的野心から、2001年以来ナニングは毎年チェコのノビー・ポアを訪ねている。才能のあるガラス吹き工や研磨工に囲まれ、彼女は色彩の探求に傾倒している。チェコの作業場は、長い歴史を持つ昔からのガラス窯にたくさんの色付きガラスを保持していて、たくさんの色を使う色彩研究への取り組みを容易にさせているのだ。また、研磨や磨き、金彩色など仕上げの工程という点でも、ガラス精錬の本拠地ノビー・ポアは、彼女に新しいチャレンジの場を提供している。おびただし数の伝統的な製造パターン、材料用具から、ナニングは作品の仕上がりをサポートする加工されていないダイヤモンドや花形の研磨剤を、芸術的に研鑽した確かな目で選び出している。

ナニングはここで、ガラスの厚みが違う切れ込みのあるフォルムを作らせ、それをさらにカットし研磨している。このガラスの内部にさまざまな世界を溶かし込み、独自の芸術を作り上げるのだ。それは、ボヘミアの伝統的な研磨技術であり、時に日本の着物から選び出した装飾的な花柄であり、現代の光学レンズであり、また時には自然や結晶学が立ち現れることもあり、まったく驚かされる多彩なコンビネーションである。特に目を躍らせるのは、オブジェクトの内部にきらめくプリズムだ。まるでガラスの結晶が基になって、あたかも宝石が自然発生したかのように見える。

ナニングはまた、ガラスに金彩色を施す技術も取り入れている。これは現代ではあまり使われなくなった技術であるが、これが皿や鉢などの作品に文字通り官能的な豊かさを与えている。

インスピレーション

「メキシコ、トルコ、そしてアジアへの旅行から戻るといつも、私は色やフォルム、それに旅行中に感じた情調などで頭をいっぱいにしてアトリエに入ります。これがその後の作品に深く影響してくるのです。」

ナニングはインスピレーションを何十枚ものスケッチやデッサン、写真などに記録して残し、資料として作品制作に利用する。ほとんどの場合、彼女のインスピレーション源は分かりやすいものだが、それを他のものと次々に組み合わせていくので、作品はインスピレーションがそのまま形となったものではけっしてない。

号ならびにザウデルダム号一等客専用食堂の天井装飾のオーダーも受注し、人々の注目を集めた。豪華客船の一等客専用食堂の天井は、天地が反対になった優美な花園で飾られた。「フルール・ド・メール/海の花」は、花や葉に施された金彩色、あるいは金箔やプラチナで、華やかな輝きを船内に放っている。これらの作品、また公共の場所に設置された作品の多くに、ナニングは最新のコンピュータデザインを使用している。他にも、産業用に大規模プロジェクトにも応用できる新しい仕上げ用上塗りを開発した。

ガラス

1994年、国立ガラス博物館とガラスメーカー、ロイヤル・レールダムからの招待で、初めてガラスを素材とした制作を試みる。始めはこのガラスという、彼女にとっては未知でまだ身近ではなかった素材に、陶芸で確立していた技術を使用した。膨らんだオブジェクトができ、それをカットしたり研磨を繰り返して、また新しいフォルムが生まれてくる。水滴の形をしたものを加えた小さめのオブジェクトが、かっちりとした隙のない円筒と組み合わせられ、新たに視覚的な安らぎが生じる。また、内側につや出しの施された、線模様が特に目を引く見事な大皿もある。

ガラス制作はその後も続けられ、次第に彼女の制作活動の大きな部分を占めるようになる。

ロイヤル・レールダム、レールダムのガラスセンター、そしてアムステルダムのガラス工房「ファン・テッテロード」など、さまざまなガラス製作現場で作品制作を試みながら、彼女は次第にガラスという素材に慣れ親しんでいく。オランダで制作した自分のガラス作品から、彼女は新しいアイデアを開発、2001年以来チェコにおいてそれが実際に生産されている。

吹きガラスの制作の傍ら、溶解したガラスでの制作も行っている。ガラスの装飾パネルがついたケース3台、装飾的なモニュメンタル用窓ガラスなど、およそ無限と言ってもいいほどのデザインや構成をもつ作品が次々と生まれている。

大地/テラ

90年代中期のナニングの陶芸作品は、日本へのたび重なる訪問がその土台となっている。数世紀もの長い歴史を持つ禅宗の庭園様式にインスピレーションを受けて、平行した線が入った茶碗や、ふしくれだつて石化した木がセラミックの構成体とともに継ぎ目なくすべらかに新しいひとつの物体へと融合していくオブジェクトが制作された。

「きっちりとした幾何学的なフォルムの皿は、時にはただの平行な線模様だけしか入れませんでした。ちょうど静かに流れ去る水のように。中には、古典的陶芸と現代的な自主自立芸術の中間に位置する、もっと複雑な構成のものも制作しました。」

「オブジェクトは地球上にある現実のものですべて自立しています。」

大地から生まれ地表に現れ出たのです。まっすぐな線は、耕された農地や禅の庭を思わせます。このような理性的なフォルムを、自然の生物的なフォルムと組み合わせています。こうして感情と理性とをつなぎました。それから活力と静的なやすらぎの場所も。私は、正と負の間、静と動の間、形あるものの内と外の間、そして成長と重力との間には、バランス、ハーモニーがあるべきだと考えています。」

植物 / ボタニカ

1996年頃、花のつぼみや種にインスピレーションを得たいくつかの作品が、だんだんとひとつの作品群として発展していった。コンパクトな形のつぼみから、風にそよいでいるかのような葉を持つ優美な花が生まれる。花はやがて、水の流れに身をうねらせる水中の生き物に変化していく。

花のつぼみは、アールスメア市庁舎や、ドリーベルフン市にある国立警察隊本部前に設置されたオブジェクト作品の制作のインスピレーションにもなった。建築家ポール・ファンレーウンとハーグ市にある会社「ストラクチャー'68」との共同で、釉をかけた複数の部分から組み合わせられた等身大のオブジェクトが制作された。また植物 / ボタニカ作品シリーズの一環として、ホーランド・アメリカ航路の豪華客船オーステルダム

ギャラクシー / 銀河系

刻々と膨らむ宇宙と目も眩むばかりのまばゆい星々の集中した星雲が新しいインスピレーションとなって、1990年にはギャラクシー / 銀河系シリーズの作品群が登場した。南ホーランド州で開催された'90年オランダ陶芸展でこの作品を発表すると、バーバラ・ナニングは一躍名を挙げることになる。デルフト市にあるプリンスンホフ美術館内に設置された作品「ギャラクシー / 銀河系」は、粘土と釉だけに頼った既成の陶芸界に大きな衝撃を与えた。巨大な回転された円盤型のオブジェクトは、明るさがもてはやされた時代には忘れられた、けれど陶芸の純粋主義者たちからは時代の先端に立つ福音として目されていた陶芸の肌合いを持つことで、時代を一步先に進めたのだった。

ナニングは釉と化粧土を使用せず、純粋な彩色を施した。冷たい素材に冷たい仕上げ。樹脂の合成物を使ってストーンウエアの各構成部分を組み立てることは、あたかも冒険であるかのように受け止められた。もはや熱い焼き窯からは、いかなる魔術も生じないのだ。彼女が開発した技術は作業に手間はかかるが、的確な芸術表現を可能にした。そして、ラッカー仕上げと彩色そして砂の組み合わせが、画家と陶芸家の世界をつなぐことになる。これによって、それまでは絵画の世界だけに限られていたさまざまな色が、異質の陶芸界で新たな可能性を開くことになった。ナニングが使用している無限な色彩の広がりには、実は非常に限られた数の純粋色だけで構成されたパレットから生まれている。クリアー・レッド、インテンス・イエロー、ディープ・ブルー、プリリアント・パープルなどの鮮やかな色が、思いがけない、ほとんど非現実的なまでの個性を彼女の作品に与える。細かな砂を混ぜることでオブジェクトの色を紡ぎだし、輪郭をソフトにする。

「永遠に続く動き、惑星の回転、星そして分子に私はすっかり魅了されていました。そして、こうした動きを形にして残したいと願う強い気持ちで、切り離された回転体で構成された色鮮やかなオブジェクトに結晶されました。」

「1979年から1983年にかけては、回転するつぼの色付に力を入れていました。パウハウス派の、ことにヨハネス・イッテンの色使いを基本に制作していました。同時にインドやメキシコで作られる伝統的な昔風の皿やカップにもとても心を惹かれていました。それも陶器そのものに惹かれていたのではなく、テキスタイルやプラスチックなどの生活用品に使われている鮮やかで力のある色使いにとっても興味をもっていたのです。」

この時代に制作されたカップやつぼには、メキシコから持ち帰った色鮮やかな糸が装飾として、あるいは作品の構成部分として使用されている。

化石

1988年にカットされた円筒を組み合わせた作品を制作してから、彼女の作品は大きな芸術的飛躍を見せる。記念物として設置される大型の作品制作への希求がより顕著になってくる。この時代に制作されたいくつか、彼女の作品として公共の場所に初めて設置された。

化石の作品には何も彩色せず、ページュのストーンウェアの色をそのままに残した。これらの作品は、トルコの Cappadocia を訪れて、そこで見た灰白色の巨大な岩石に圧倒される風景や、岩を穿った人々の住居、雨風で風化した岩などを見て得たインスピレーションによって生み出された。

「その不毛でモノクロームの純粹さに強く心を動かされました。ここでのインスピレーションが、軸をかけない、ひもを巻きつけた回転つぼを制作するきっかけになりました。やっていたら巻きつけたひもの隙間から土がはみ出したのです。これが渦巻きのような形の化石フォルムシリーズの発端でした。最初が濡れた粘土の円筒、それからひもをそれに巻きつけ、手の圧力で粘土を外に押し出し回転させてみました。そして次に底を切り取って、できあがった回転フォルムを横にしてみたら、自由なオブジェクト作品へと変化したのです」

進化

ひとつの芸術が時間を重ね変化していくさまを図にしてみる、これを科学者ダーウィンの言葉を借りて“進化”と表してみた。けれど、自然が決まりきったルールどおりには変化しないように、これも型どおりの枠におさまってしまう図ではない。バーバラ・ナニングの作品は、種類や系統などに分類できるオブジェクトの連続体である。また彼女の作品は、以前の作品から派生してきたものともいえる。作品のアイデアはしばしば時間をかけ練り上げられるが、けっして短絡的な直線でつながったものではない。作品のフォルムは、しばしば異質なものの混成であり、ちょうど自然の気まぐれがそうするように、まったく別の新しい魅力を醸し出す。時には、さまざまな発見と経験を積み重ねる長い長い回り道の後で、ようやくたどり着く場合もあるのだ。

こうしていつも、少しも迷いを見せない、的確で、はっきりとした意思を持つ作品が生み出される。

芸術家としてのスタート

バーバラ・ナニングが陶芸家としてスタートしたのは幸運なことだった。70年代後期、オランダでは陶芸が高く評価されるようになっていたからだ。アムステルダム市にあるヘリット・リットフェルト美術アカデミーでは、ヤン・ファン・ド・ファールツなど情熱に溢れた教授陣の指導下、学生たちがそれぞれ優れた個性を伸ばしていた。誰もが必要な知識と技術をしっかりと身につけた、創造性と意欲に溢れる個性的な芸術家だった。ことに1979年度卒業生は、抜き出た才能を持つ者ばかりだった。ヘールツ・ラップ、バプス・ハーネンそしてポウリュス・レーウンなどがバーバラ・ナニングと同期生である。彼らは陶芸芸術の新しい時代の核となるグループとして活躍し、世界的にも知られるようになった。彼らはその作品を通して、芸術の機能性と装飾性そして自主自立の境界線を模索し追求していた。

バーバラ・ナニングの卒業制作は、細心の注意を払って回転させたストーンウェアのカップと皿だった。この作品の持つ静かな雰囲気や独特の色使いは、その後の彼女の作品にも、見る者に深い印象を与える個性として見出される。

バーバラ・ナニング _ 進化

バーバラ・ナニング _ 進化